私が伝えるヒロシマ

豊島岡女子学園中学校　１年　山本（やまもと）　結花（ゆいか）

広島の街を最初に見たとき、原爆が落ちた街とは思えませんでした。ビルや木が立ち並んでいて、特に変わったところのないきれいな街だったからです。しかし、平和記念公園にある、原爆ドームだけは違いました。原爆の被害をそのまま残していて、ボロボロでした。原爆の威力を感じ取ることができました。しかし、ただの変わった建物という写真撮影スポットになってしまいそうな気もして、よりいっそう、自分たちが原爆のことを伝えていく必要があると感じるようにもなりました。

５日の午後、平和記念資料館で、様々な写真を見ました。血まみれの服を着て包帯を巻いている女の子、ケロイドになった人の背中。亡くなった人たちの大量の頭蓋骨、それに向かって頭を下げている人たち。撮影したカメラマンは、この光景が怖くなかったのだろうか、と疑問に感じていたところ、そのカメラマンの随筆が展示されていました。そこには、あまりにも悲惨な光景を見て、涙があふれシャッターが切れないこともあったけれど、この状況を伝えていかなければならないという気持ちがあり、頑張って撮影した、と書かれていました。私は、写真でも一度見たら頭から離れないほど怖いのに、カメラマンはその恐怖に耐えて必死に撮影したのだと感じ、心を打たれました。その伝えたいという強い気持ちを、私も受け継いでいきたいと思いました。

６日、平和記念式典に出た後、ＡＮＴヒロシマの方々と交流しました。その中のフィールドワークで、被爆樹木について学びました。被爆樹木の中で一番心に残ったのがユーカリです。ユーカリは、まっすぐ成長する樹木ですが、そのユーカリは被爆から数日で爆心地の方向に向き、そのままその方向に成長して、現在も爆心地の方向を向いています。それだけ原爆による光はとても強烈だったということがひしひしと伝わってきました。

また、大倉ヨシエさんという人のことも教えてもらいました。大倉さんは、原爆投下当時、高等女学校３年生で、広島城本丸内にあった中国軍管区司令部で電話連絡の仕事をしていました。その仕事中に、原爆が落とされ、その後原爆の第一報を出したそうです。原爆投下直後に、大倉さんが街の様子を見るためにあがった土手に、私ものぼりました。そこから見える広島の街は、ビルや木が立ち並ぶ新しくきれいな街です。しかし、大倉さんが見た広島の街は、一面焼け野原で、その土手から海まで見えるほど何もなかったそうです。街を見ながらそのことを想像してぞっとしました。原爆が一瞬ですべてを奪ったことを改めて実感しました。また、私は軍人や役人ではない人が原爆の第一報を出していたことにも驚きました。自分の中で、戦争は軍人や役人が中心のもの、という思い込みがあったからではないかと思います。実際には一般の人も戦争に大きく関わっていて、多くの方が亡くなっているのです。

私は広島で多くのモノに出会いました。被害を受けたそのままの姿で原爆の威力を伝える原爆ドームを始めとして、資料館の写真、大倉さんの話、被爆樹木などたくさんのモノが原爆の恐ろしさを伝えていました。二度と核兵器が使われないように、私はその恐ろしさを伝えていかなければならないと強く思いました。